
龍斗と魔法の方程式

RE : LIGHT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍斗と魔法の方程式

【Nコード】

N9940I

【作者名】

RE：LIGHT

【あらすじ】

この世の中には知っているようで現実では有り得ないと思われる世界がある。

この物語はそんな世界の学園に入学した。此方の世界の少年の話
ある少年が居た

その少年は人とは違う力を持つ以外何処にでもいる茶髪の男子

その男の名は坂口さかくち 龍斗りゅうと

そんな龍斗にある日男が訪ねてきて…

？「すいませーん誰か居ませんか？」

龍斗「はーい今行きます」

さーて壮大な物語の始まりだ。

この作品の中の単語は全て自分のうる覚えな知識から作られていますので、矛盾している可能性がございますのでご指摘お願いします

また、この作品のあらすじは書きながら考えるので、途中変な進み方になったり伏線をひいたけど全く活かせてなかった、という感じになる可能性があります。

よろしくお願いします

モバゲーでただいま執筆している作品をこちらに載せたものです

第一章 訪問者

サカグチ リュウト
坂口 龍斗

身長は173?と身長は高く顔はカッコイイタイプではなく、どちらかと言うとカワイイタイプで髪の色は明るい茶色をした。

中学三年生で学力・スポーツ共に優秀な男の子である。

彼は高校受験にも合格し高校の入学がいよいよ一週間と迫っていた。

ピンポン

インターホンがなったため龍斗は急いでドアに向かうすると

?「すいませーん誰か居ませんか?」

インターホンを鳴らした相手が留守かも知れないと思い声を出して聞いてきた

龍斗「はーい今行きます」

龍斗はそれを聞くと扉を急いで開けた。

ガラガラ

龍斗は扉を開けたそこに立っていたのは身長は180?位の二十代前半の金髪のカッコイイ外国人の男だった。

龍斗「どちら様でしょうか？」

龍斗は知り合いに金髪の男はいなかったために質問をした。

？「いきなりの訪問すいません

あなたが坂口 龍斗君ですか？」

龍斗「はいそうですが」

金髪の男は龍斗に尋ねてきたのを聞きすぐに答えた。

？「私はウエル・スタインという者です。」

そう言いウエルという男は名刺を渡してきた。

龍斗「それでどういったご用件で？」

龍斗はウエルと名乗った男に不信感を抱きながら聞いた。

ウエル「実は私は魔法学校の教師をしてい……」

ガシャン

龍斗はウエルと名乗る人物が言い切る前に思いつき扉を閉めた

龍斗（なんだよアイツ頭狂ってんのか魔法そんなの空想上の物語だろ！！）

ウエル「全く人の話くらい聞いてもらいたいものですな。
仕方がない

『炎の精霊 我の願いに答え火の玉を ファイヤボール』」

ウエルはぶつぶつと文句を言った後詠唱をして扉に向かって、自分の魔力で作った火の玉をぶつけた。

それと同時に扉は吹き飛び龍斗の頬を掠めて壁にぶつかった

ウエル「どうです？

これで話を聞いていただけますか？」

ウエルは火の玉で扉を吹き飛ばしてあいた穴から、笑顔で歩み寄ってきた。

龍斗「てめー何人んちの玄関ぶつ壊してんだ。」

ウエルの力を『魔力』と呼ぶならば龍斗には『気』というものを扱う力があつた。

それによつて龍斗は気を足に纏い『瞬歩』を使いウエルに殴りかかった。

ウエル「!!!??」

バキッ

ウエル「ゴフッ!!」

瞬間移動にしか見えない龍斗の『瞬歩』に反応出来るわけがなく拳はウエルの顔目掛けてぶつかった。

龍斗（弱っ!!）

龍斗に思いつきり顔面にパンチを入れられてしまったウエルの体は五メートル先の壁にぶち当たった。

龍斗「オーイ
生きてるか」

龍斗は床で延びてるウエルに呼びかけるが返事は返ってくることはなかった。

龍斗（もしコレが某人気ゲームだったら今頃ただの屍のようだとか出るんだろうな）

龍斗はそんな事を考えながら気を使いウエルの傷を治し始めた。

傷は数分の内に消え去っており、龍斗は体重70キロはあるであろうウエルを担いで二階に上がりベットのの上に寝かせた。

そして数時間後…

ウエル「オハヨ」龍斗君」

ウエルはさっきまでの堅苦しい喋り方と違い気の抜けるような口調で言葉を発している。

ウエル「さっきの話の続きしてもいいかな？」

龍斗もウエルを殴った罪悪感から話を聞くことにした。

まあ、実際ウエルが全部悪いんだけどね。

そして、ウエルと龍斗は茶を持って居間に行きちゃぶ台の所で座った。

書き忘れていたが龍斗の家は純和風で某人気ゲームのFa eの主人公の家くらいの広さはある。

龍斗「そんな重要な事書き忘れるなてんじゃねーよこのアホ作者」
全くもって面目ない

ウエル「龍斗君さっきからなにぶつくさ独り言言ってるの？」

龍斗「いや何でもないですよ」

龍斗（つくかなんか口調馴れ馴れしくなってない？）

ウエル「もしよかったらタメ口でもいいよ」

ウエルは本当に教師なのだろうかと疑いたくなるようなことまで言ってきた。

龍斗「マジで、ならタメ口で話すよ
つか何故俺の心を読めた」

ウエル「顔に書いてあるよ」

龍斗はそれを聞くとしかめっ面になりウエルは逆に笑顔になった。
にしても猫を被るのがうまい二人だ。

龍斗・ウエル「何か言ったか」

いや何にもいってないよ

ウエル「まあいいやじゃあ話すね。」

ミハエルは真剣な顔に変わり話し始めた。

ウエル「さっき話したとおり僕は魔法学校の教師だ
実はきみを待待生として入学させたい」

龍斗「はあゝ!？」

龍斗が驚くのも無理はない、彼は受験も終わり高校に入学の書類ま
で出しに行ってしまったのである。

しかも彼には魔力の存在事態ついさっきまで知らなかったのだ。

ウエル「大丈夫だ学費等はこちらで免除しよう。

しかも君には見たところ大量の魔力ある。

勿論高校側にもこちらで話を付けておく、それでもダメかい？」

ウエルは半ば諦めた表情で聞いてきた

ウエル（まあ普通自分が努力して入った所何だから簡単に諦めるわ
けないよな）

龍斗（普通に学校に通うよりおもしろそうだな）

龍斗「別にいいよ」

ウエル「そうだよね駄目だよね
っていいの!!?」

龍斗「だからイイって言ってるじゃん」

まあ、ウエルが驚くのも無理はないと思うが、龍斗はさも当然そうに言った。

ウエル「ありがとう」

これで学園長に殺されずにすむよ」

ウエルは泣きながら呟いた。

龍斗（学園長どんだけ怖いんだよ）

龍斗は若干学園長のことに關して後悔したが今更断れないので入学式の日時等を聞くことにした。

ウエル「それならコレを見てくれ。

ここにある程度の学園の情報が書いてあるから」

彼の手にはいつの間にかカバンが持たれており、その中から学校案内の冊子が手渡された。

ウエル「因みに出発は明日だから。」

龍斗「ふう〜ん明日ね
って明日かよ!!?」

ウエル「うん、明日

因みに今日は龍斗君の家に泊まるから宜しくね」

龍斗「宜しくね

じゃね〜!」

龍斗がキレるのも無理はない今は夕方の五時準備といっても持つて行くものもロクにないが、取りあえず支度には時間がかかる。

しかも今日は二人分の夕飯を作らなければならない。

龍斗「はあ」

全くとんだ疫病神を招き入れてしまった。」

龍斗は後悔しながらも料理を作り始めた。

そして、出来たのは何故か家の純和風の風景にあわないパンやシチユー等だ

ウエル「コレ

全部龍斗君が作ったの?」

龍斗「当たり前だろ

俺が作らなきゃ誰が作るんだよ

それともウエルは外人っぽいからメニューは洋食でいいと思ったんだけど、マズかったか?」

ウエルが驚いても仕方がないこの料理はなにをとってもたかが中学三年が作ったとは思えないレベルのものばかりだった。

龍斗「なに口開けて驚いてるんだよ。

そんな驚くことないだろ俺だって一人暮らしを長い間してきたんだからコレ位できて当たり前だろ」

にしても中学三年が作るものではない

ウエル「何はともあれ頂きまゝす」

パクッ

ウエル「ウマゝい

龍斗君いや龍斗様今まで食べた中で一番美味しいよ」

龍斗「龍斗様って大袈裟な

まあおかわりまだまだあるからドンドンお「おかわり」っへ!？」

ウエル「おかわりだよ龍斗君」

龍斗「ワ ソン君みたいな言い方するな。

はいお代わりのシチューとパン」

文句を言いながらも龍斗はウエルにパンとシチューを渡した。

ウエル「ありがとう」

龍斗「どう致しまして

そういえば魔法学校って何処にあるんだ？

ヤッパリイギリス辺りなのか？」

ウエル「やだな」龍斗君またまたご冗談をそんなのこの世界にあつたらすぐにばれちゃうでしょ」

ウエルはシチューを飲み干した？後そう言った。

龍斗「ちよつとまで

まさかライトノベルとかでよくある別世界にある魔法世界なんて事はないよな。」

ウエル「だからそう言ってるじゃん

それにこれも列記としたしょう「それ以上言っんじゃね」ゲフッ

龍斗はまたしてもウエルに向かって怒鳴りながら殴りかかった。

勿論またウエルの体は壁にぶち当たった。

しかし

ウエル「ふう」

いや、さっきのこともあったから『魔法障壁』張って良かったよ」

なんとウエルはあろう事か何事もなかったかのように立ち上がって来た

龍斗「そんなバカな

ウエル『魔法障壁』ってなんだ言え」

ウエル「え、何で僕が怒られるの」

龍斗「ほつ、もう一発殴られたいようだな」

ウエル「そ、そんなことないよ」

ウエルは龍斗に理不尽なキレられ方をしながらもしっかりと話し始めた。

ウエル「『魔法障壁』っていうのは書いて字のごとく魔法の障壁だよ。

初めて会ったときはそれを張って無かったからぶっ飛ばされて気絶しちゃったんだけど、今回は龍斗君が料理作ってる間に張っておいただ。

それに龍斗君だって手加減して力使わなかったでしょう？」

龍斗「バレてたのか、力加減を気にしながら殴らずに普通に殴ればよかったかな。」

龍斗が落ち込んでいるのかしかめ面をしながら独り言を言ってる間にウエルは残っていたシチューやパン等を全て平らげていた。

恐るべし魔法使いの胃袋？

ウエル「じゃあ風呂は僕がやっておくから、龍斗君は荷造りしてきなよ」

龍斗「えっ！

ああ…そうしてくるよ」

そう言つと龍斗は部屋に戻っていった。

ウエル（そついえばノリで言ったけど風呂場ってどこ？）

ウェルはそう思いながら風呂場の搜索を始めた

変わって龍斗の部屋

龍斗は目の前に何故か多くの武器が置いてあり龍斗はそれ見ながら悩んでいた。

龍斗（うーん

今日貰った冊子によると俺が通う魔法学校つてのには魔法剣士と魔法使いの大まかに分けて二つがあるらしいから俺は魔法剣士に多分入るんだな。

しかし、武器をどうするか…）

実は彼が武器を大量に持っているのは彼が武器職人であるが故である。

彼の家系は代々武器を造ることを仕事に持っていた。

そして、武器を持つこと造ることを禁止された今でも彼らの家系が代々もつ山で武器を造っている。

龍斗（迷っていても仕方がないな。

決めた俺はこの武器でやっていこう）

龍斗が選んだのは彼が造った中でも最も完成度が高いと自負する漆黒の太刀『闇霧^{やみさめ}』と鎖かたびらや投擲用のナイフや普通の物より長い槍等多種多様な武器たちだ。

龍斗（よし、武器も選んだしさっさと他の支度もしないとな）

龍斗はそう思い支度を再開した。

ところ変わってまたウエル

ウエルは今現在坂口家の廊下で迷子になっていた。

ウエル「ここはどこなんだ」

ウエルは既に心身共に疲れ果てていた。

何故かというところこの家の構造が非常に悪かった。

まずは迷路のように入り組んだ廊下そして、何故かそこら中にある罠

しかも罠といっても生半可なタライ落とし等ではなく弓矢やダガーが飛んできたり落とし穴があったりしていた。

そして、遂にウエルは風呂場らしき場所の扉を見つけて走って扉を開けた。

その後…

ガコン

鈍い音が風呂場全体に響き渡ったそう、ウエルがタライ落としを喰らったのだ。

ウエル「む、無念…」

ウェルはそのまま気絶した。

龍斗「そういえば畏解除しなかったな。
まあ、いつか」

ウェルが見つかるのはそれから三時間後の事だった。

第二章 龍斗降り立つ

次の日

龍斗はいち早く起きて朝食の準備を始め食べ終わって何時間もたった頃。

龍斗（ウエルの野郎いつまで寝ているつもりだ。）

龍斗はウエルが自分で起きるのを待っていたのだがはや待つこと2時間以上既に朝食を終えあと少しで今度は昼食を作らなければいけない様な時間だ。

龍斗（仕方がない起こしに行くか）

龍斗が重い腰を上げた瞬間

ウエル「さあ、行こうか」

ウエルが涼しい顔で居間に入ってきた

龍斗「ウエル一つ聞く、何故起きるのがこんな遅い」

ウエル「実はここにくる前にゲーム買い込んできたから、それやってたら寝坊しちゃって」

龍斗「ほゝそついう事か」

龍斗はそついうと荷物をいったん床に置くとウエルに向かって歩い

てきた

ウエル「あれ、龍斗君いかないの？」

ウエルは自分の荷物を持ちながら苦笑いで言ってきた。

龍斗の額には青筋を浮かんでいた

龍斗「壁に頭を突っ込むのと死ぬのどっちがいい？」

ウエル「痛くない方で」

龍斗「無理だな

今何時だと思つてやがるこのくそ野郎が！！」

ウエル「グフツ」

これで何度めの説明だろうかまたウエルは宙を舞い壁に激突した。

しかし、今回はいきなりすぎて『魔法障壁』は張れなかったため、
気絶してしまった。

龍斗「しゃくないな
よいしょつと」

さすがの龍斗も起きるまで待てないので、バケツとウエルをもって
？庭にでた。

そして、龍斗はいたずらっ子のような笑顔を浮かべながらウエルの
顔面にバケツいっぱいに入った水をぶっかけた

ウエル「べはぶりや

な、なにが起きたんだ!？」

ウエルは驚きながら周りを見渡すと、腹を抱えて笑っている龍斗がいた。

ウエル「なに笑ってるの。

まあいいや龍斗君ソロソロ行かない？」

龍斗「そうだな」

龍斗は笑うのを我慢して部屋に戻り荷物を持ってきた

そして廊下を歩きながら

龍斗（これで我が家も暫く見られなくなっちゃうのか
そう思うとなんか悲しいな）

と考えていると先に荷物を持って門の前で待っている、ウエルが見えたのでウエルの元へと走って向かった

ウエル「龍斗君もういいの？」

龍斗「ああ、もう別にいいぜ」

ウエル「じゃあいこうか」

ウエルが確認のためもう一度聞くと龍斗は頷いた。

ウエル「『汝 我の言葉に答え 世界の扉を開けよ world of the gate』」

ウエルが呪文を言った直後辺りが光に包まれた。

光が消えると目の前にあったのは、龍斗の家ではなく一面の草原だった。

ウエル「ようこそ我らの世界『アルケイディア』へ」

ウエルはそういつとわざとらしく頭を下げてきた。

龍斗「ここが魔法世界か、何か自然があふれてる場所だな」

ウエル「確かにここは君たちの世界と違って機械じゃなくて基本的に魔法で物事を行ってるからね」

龍斗は納得した感じでうなずいた

龍斗「確かに有からしか作れない機械と違って無から物を作る事が出来る魔法があれば納得だね」

龍斗はそう言い深呼吸をした。

龍斗「そういえば

作者ちよつと質問いいか？」

黒のローブを着た男作者が現れた

作者「どうも作者のlightです。

たまに出て来ることがございますがよろしく願いします。
ところでそれは答ええないといけないか？」

龍斗「多分読者も気になってる」

作者「そうかなら答えてやろう」

龍斗「何でウエルが『ファイヤーボール』やったときはカタカナで
『world of the gate』は英語なの？」

作者「それは、技の難易度によってカタカナと英語に分かれてるからだよ

まあ、後でウエルに聞けばわかるよ」

龍斗「分かったわざわざありがとうね」

そして作者はまた消えていった。

ウエル「なに自分はそういうのOKで僕は駄目なわけ？」

『その事はもう水に流せ』と言わんばかりの視線を受けつつ文句を
言い続けるウエルであった。

龍斗「さてと、ウエルソロソロ行くぞ」

ウエル「ちょっ！？無視ですか。」

龍斗「んで、どっちに行けばいいんだ」

ウエル「そっちだよ。」

ウエルはそういつと龍斗から向かって左側に指を差した。

龍斗「そうかそっちか」

そう言った途端龍斗は左に進んでいつてしまった。

勿論ウエルを置いてだが

ウエル「ちよつと待つてよ。

まだ話は終わつてないよ。」

ウエルはその後も色々と言つてきたが、無視され続けた。

そして、三十分位坂道を歩き坂道を登り切つた時だった。

龍斗「なんじゃこりゃー!!」

龍斗は目の前の光景に度肝を抜かされた。

そこには街があつた。

しかし、ただの街ではなく、高さ二百?を越すであろう木の上に五階建てだと思われる建物があり、その下には城下町のように建物が建ち並んでいた。

ウエル「ここが学園都市グローリア。

龍斗君がこれから勉強していく学校だよ。

さて、とりあえず街の中に入りる?」

龍斗「はあゝ！？

お前こつからあそこまで絶対三キロ以上あるぞ」

龍斗が言うとおり街までは最低あと三キロは歩かなければいけない位離れていた

ウエル「龍斗君

君は何か重大な事を忘れていないかい？

ここは魔法世界なんだよ『風の精よ 我らをかの地へ誘え ウィン
グロード』」

ウエルが呪文を唱えた瞬間龍斗とウエルは風と共に姿を消した。

そして、龍斗とウエルはいつの間にかグローリアの門の前にいた。

龍斗「なんだこりゃゝ」

ウエルは魔法を唱えたのだが魔術師ならまだしも龍斗は魔法のまの字も知らないド素人である

そのため普通はなにが起こったのかすら理解しようとしてもかろうじて理解出来るのは魔法を使ったという事だけである

しかし、龍斗はその不可解な状況をなんとか理解しようと必死で考えていた。

龍斗（今のは魔法か？

だとしたらどんな魔法なんだ。

移動速度を上げた？いや、それなら俺は少なからず風を受けるし俺も動かないといけないからそれはないはずだ。

だが、俺は風なんて全く受けなかった。
だとしたら瞬間移動の類なのか？)

龍斗の中では自問自答が続いていた。

龍斗の考えていた答えは半分くらい当たっていた

『ウイングロード』は風の道を作り上げそれに自分達がのり移動するという術である。

ちなみに、この術を使用する際は風の抵抗を最小限に減らすために、障壁を張り風が当たるのを防ぐため、龍斗には風が当たらなかったのだ

しかし、魔法というヒントのみでここまでの推理をするのはさすがは天才なだけのことはある

ウエル「龍斗君!!
早くきなよ」

龍斗が考えている間にウエルは門番に手続きをして、龍斗を待っていた。

龍斗「あ、ああ
今そっちに行くよ」

そついい龍斗はウエルの元に走っていった。

門番「ようこそグローリアへ」

門番は門を通り抜けるさいに明るくいつてきた。

門を通り抜けるとそこには生徒と思われる制服らしき物をきた人と地球とあまり変わらない格好にローブを着た人々が中世ヨーロッパを思わせる街並みを歩いており、様々なお店があることによってより一層賑わっていた

龍斗はその光景を見ながらある二つのことに気がついた。

龍斗「ウエル

今更だけど何で俺ここの世界の言葉がわかるんだ？」

ウエル「それが『world of the gate』が高難易度の理由だよ。

ただ地球に行くのなら中級程度だけど言語に行く世界に合わせるから難易度があがるんだ」

龍斗「なる程な

あとあそこに走ってるのって車だよな？」

龍斗が見つめる先には車みたいなものが走っていた。

ウエル「うん

あれは車だよだけど、地球と違って燃料は魔力だから自然にはいいよ」

龍斗（確かに煙はでてないな）

ウエル「ほかに質問は？」

ウエルは少し自慢げな顔をしながら聞いてきた

龍斗「特にもうないかな」

ウエル「そうじゃあ龍斗君早速いこうか」

龍斗「何処へだよ」

ウエル「勿論ギルドだよ」

『風の精よ 我らをかの地へ誘え ウイングロード』

そう言った直後また龍斗達は風を纏い消えていった。

龍斗は門の前に着いたように今度は木の前に着いた。

ウエル「到着」

ウエルは隣にいる龍斗を見たが、龍斗の額には青筋が若干浮き上がっていた

龍斗「街並みを見ながら行きかけたのにふざけんな
後さつきからなんだよあの術」

ウエル「あれは『ウイングロード』って言って風の道に乗って移動する術だよ」

さてさつさと中で書類書いて終わらせようよ僕は早くゲームやりたいんだよ」

龍斗（つくかだったら何故アルケイディアに来た時にすぐに魔法を使わなかった）

龍斗「わっつたよ

俺も早く学校みたいからさっさと済ませようぜ」

これ以上ここにいて文句を言っても始まらないので龍斗は言いたいことを胸に無理矢理抑えるとそっくりウエルを置いて木に不自然についた扉の中に入っていつてしまった。

龍斗「すげー」

龍斗はなかの内装をみて驚いてしまった。

木の高さからして高いことは想像出来たがかなりでかい高さは優に30メートルはあるような気がする。

そして建物は筒上になっておりスロープを上ると周りにはフロアがあるような形になっている

龍斗が驚いているとそこにウエルが来た

ウエル「龍斗君早いよ

さて受付に行つてさっさと済ませよう早くしないとあの人が来ちゃうから」

ウエルが焦りながら言った

龍斗「あの人って誰だよ」

ウエル「あの人っていうのはギルドマス…」

ウエルが言い終わる前に扉が吹き飛び煙が舞い上がった

周りからは「またか」や「いい加減にしてほしいよ」等の声がため息とともに聞こえた。

龍斗（な、なにが起きたんだ）

龍斗は隣にいるウエルに聞こうと隣を見ると顔が真っ青になったウエルがいた。

ウエル「龍斗君ひとまず隠れるよ」

ウエルはそういった瞬間勢いよい走り始めたと思ったが赤髪の男に足をかけられ即座に転けて顔から地面にぶつかった

？「ウエル」

人の顔を見る前から逃げ出すなんていい度胸してるな」

いつのまにか近くにいた赤髪のウエルを転けさせた男はそう言つと倒れているウエルを蹴り出した。

青髪の男「兄さんちよつとストップ」

そこに先程の男と違い青髪の男がウエルと赤髪の男の間に入っていた

赤髪の男「弟よ邪魔をするな今からコイツの人生に終止符を打つてやる」

赤髪の男は手に『ファイヤーボール』をためて今にも撃とうとしていた

青髪の男「ちよつといい加減にしてソコにいる男の子が困ってるじやん」

青髪の男はしびれを切らして叫んだ。

赤髪の男「えっあつ

ごめんな茶髪少年」

龍斗「いえいえ

それよりどちら様ですか？」

赤髪の男が謝ってきたためいつもの態度ではいられず、つい丁寧な言い方で聞いた。

赤髪の男「俺の名前はソル・クロウリーよろしくな」

青髪の男「私の名はレイ・クロウリーと言った兄共々よろしくね」

どうやら赤髪の男がソル、青髪の男がレイというらしい

ちなみにソルは身長186?位でレイは178?位である。

龍斗「えっ二人って兄弟だったんですね

俺の名前は坂口 龍斗です。

ちなみに地球出身ですよろしくお願いします」

龍斗がそう自己紹介をするとウェルはやってしまったといったような顔にソルとレイは驚いて口を大きくあけていた。

ソル「何嘘言ってんだよ

そんなに魔力持ってるのに地球出身とかありえないだろ」

龍斗「いやマジなんですけど」

二人の表情はまた固まってしまいそこにさっきまで固まっていたウエルが慌てて出てきた

ウエル「二人共ワケは話すから場所変えない？」

その言葉にソルとレイは反応しまた動き出した。

レイ「そうですね

とりあえず私達の部屋に行きましょうか」

レイが言い終わるとソルが先に歩いていってしまい龍斗達はその後についていった

そしてソルはある部屋の中に入っていた。

その部屋には『ギルドマスター』と書かれた看板があった。

それを見た瞬間龍斗は大きな声で叫びをあげソルを指差して固まった。

ソル「なんだ龍斗俺がギルドマスターってこと知らなかったのか」

レイ「ちなみに、私は副ギルドマスターですよ」

龍斗（何だって）

この二人がギルドのトップの二人だってレイさんは分かるとしてソルさんは有り得ないだろ。」

ソル「何だよそのこの人がギルドのトップ何てありえねーって目つき」

龍斗「あ、いやそんな事無いですよなんかお似合いだと思いますよ」

ソル「そうか」

いやゝみんなに何時も何でこんな人がギルドマスター何だろうって目で見られるからついな」

ソルがほつとした顔をしていたため龍斗は苦笑いしながらさっきいった言葉に罪悪感を若干感じていた。

龍斗（そんなに気にしてたんだたしかに、みんなをまとめられるかは若干不安な性格してるよな）

龍斗がそう思っているとウエルがしゃべり始めた

ウエル「えーと龍斗君は今年の魔法学園の特待生で入学する子なんだよ」

ウエルが自慢げに言うとソルとレイは若干納得しないような顔をしていた

ソル「おいウエルてめー俺らの質問の答えになってねーぞ」

レイ「そうですよ」

まず彼がなぜ地球の人なのに魔法学園に特待生で入学できるのか教

えてください」

ウエル「そ、そんなこと言われたって僕は学園長の命令に従ったただだからしらないよ」

ウエルは必死なのだがその軽いしゃべり方のせいか嘘にも見えてきてしまう

ソル「それは本当何だろうな」

ソルに詰め寄られたウエルは頭をこれでもかという程上下させ頷いた。

ソル「しゃゝないなら許してやるか」

ソルがそう言うとうエルは安心したため深く息を吸った。

龍斗（この人は刑事でも普通にいけるな）

龍斗がそう思っているとソルがまた話し始めた。

ソル「じゃあこの世界に初めて来たってことはギルドの新規登録か
レイあれを持ってきてくれ」

レイ「ちよつと待っててね」

レイは部屋から出て行ってしまった。

ソル「レイがあれを持ってきてくれるまでギルドについて説明するか
ギルドってというのは主に地球という警察と何でも屋をあわせた感じ

の物だな

依頼は荷物の配達から魔物の退治までやることは様々でやる物事は危険度によってランク分けされる

下からF、E、D、C、B、A、S、SS、SSS、SSS、Zという風になっている

ちなみに俺とレイと学園長はZウェルはSSSだ

あと学園の先生は全員SS以上だからな。

それから今からやるの…」

レイ「お待ちせ致しました」

ソルが言い終わる前にレイは手に水晶と紙を持ち息を切らせながら部屋に戻ってきた。

ソル「レイそれをこっちに持ってきてくれやりながら説明する」

レイ「分かったよ兄さん」

レイがソルの前にあつた机に持ってきた水晶と紙をのせるとソルはまず水晶を龍斗に手渡した。

ソル「まず魔力を水晶に込めてみる量と属性を調べる

魔力を水晶に込めるコツは体の底の方から手の方に力を込めればお前並みの魔力量なら出せるだろ」

龍斗（なんだ内気を使うのと聞いてると大体やり方は同じだな
たかが魔力なのか気なのかっていうささいな違いか）

龍斗はそう思うと水晶に魔力なのかは怪しいが言われた通りに込めてみた。

パリーン

いきなり水晶の玉が砕けてしまいそれを見ていたウエル達は目を皿のようにして驚いていた。

龍斗「スイマセン

こんな高そうなものを壊してしまつて」

ソル「いや此方こそすまないまさか俺の大雑把な説明で魔力をいきなり出せるなんて」

レイ「私も油断していました。

地球出身つて聞いたものですから、一回目でまさか魔力を出せるはずがないとたかをくくっていましたでしたがまさかここまでとはしかし、コレでは魔力量は分かってても属性は分かりませんね
仕方がないコレを使いましょう」

レイは龍斗に先程の水晶の玉と一緒に持ってきた紙を龍斗に手渡した。

レイ「コレに先程と同じように魔力を流してみてください。」

龍斗はレイに言われた通りに手渡された紙に魔力を流した。

そうすると紙の色が変わり若干銀色っぽくなった。

レイ「なっ」

レイは驚いてしまい言葉に詰まつてしまったがまた喋り始めた。

レイ「兄さんとウエル君龍斗君は無属性だよ。」

ウエル・ソル「ええ」

それによりまたもやウエルとソルは言葉を失った。

龍斗は勿論知らないが実は無属性というのはこの世の中でも数少ない属性であり苦手な属性がない代わりに得意な属性もないといった属性である。

しかし、それ故に隙がなく無属性のみが使える術も幾つか存在する貴重な属性でもある。

例えば今現在は全ての属性が使える『World Of The Gate』がそれだ。

あれも元は無属性限定の術を無理矢理変化させて、造った物のためあれが100%ではない

本来は言語の知識とその世界の基礎知識まで覚えさせる事が出来る術である

そんな事をこの世界に来たばかりの龍斗が知る由もなくまだ、ボートとウエル達が話し合っているのを見ていた。

ウエル「どうするのギルドランク

龍斗君は魔法はともかく見た感じ接近戦なら多分あの状態の僕と五分五分位の實力だよ。」

ソル「マジかよっ

じゃあ、実力的にはS位じゃね〜のか」

レイ「兄さんそれは接近戦のみの話です

彼はまだ魔法すら使えないんですよ

だから、D位が妥当でしょう。」

ウエル「レイ君でも龍斗君はあの水晶を割ったんだよっていう事は
魔力量だけだったらAを軽く越えてるんだよ」

ソル「じゃあ、試験をやるうや

正真正銘の実力テストだ。」

ソルが言つと議題は遂にどんな内容の試験に変わっていき、試験の
内容が決まった。

第三章 龍斗のギルドランク決定試験（前書き）

試験内容

- ・竜族の中級ドラゴン『ロックドラゴン』の討伐依頼をこなす

判定基準

- ・倒せたかどうか
- ・倒せた場合どれ位攻撃を食らったか
- ・倒すのに使った時間かやられるまでに耐えたか

この3つの項目を

- ・基準値以上いていた場合A
- ・基準値にいていた場合B
- ・倒せたが時間がかかった場合C
- ・倒せなかった場合D以下

安全のためウェル達は見えない待機しており龍斗が殺されかけた場合が助けを求めた場合のみ助けそこで試験終了

ロックドラゴン…

体長五メートル色は茶色で体中に岩が付いており、結界や土、岩を
使った魔法が得意

第三章 龍斗のギルドランク決定試験

龍斗は今森の中を深いため息を吐きながら進んでいた。

龍斗（かったるい早く校舎も見たいからサッサと終わらせて帰りたいな）

龍斗は森にいきなり飛ばされその横には試験内容が書いてある手紙と龍斗が家から持ってきた槍が置いてあった

そして現在龍斗は実力テストのため今現在森の中で竜を探しているのだ

龍斗（にしてもヤッパリここは自然が豊で気持ちがいいな
ここなら内気を使わずに外気だけで十分戦えるな）

龍斗がたまに言っている外気と内気というのはまず気について説明しようと思う

まず気というのは基本的に誰の体にも存在しておりその体の中にある気を内気

体の外の大気にあるのが外気という

しかし、外気と内気では使うのに手順が変わるため難易度も変わってくる

例えば内気は体の中の物を使うため比較的楽である。

しかし、外気は大気中の気を集めて体に取り込まないといけないためとても大変である

また、気は森など自然の多い場所でないと大気中に多くは存在していないため内気を使うことが殆どになる。

だが内気にも勿論弱点はある。

内気を使うことは言い換えると体力を消費しているだ

だから、内気を使うより外気を使う方が長時間の戦闘では楽なため龍斗は喜んでいたのだ。

龍斗（そういえばロックドラゴンを探すにも手掛かりも何も無いんだよな

しかも、武器は荷物の中で一番デカイ槍かよ

多分人の荷物を漁るのはいけないから一番最初に目に付いた槍にしただろうけど、コレは扱うのに疲れるし嫌なんだよな

そのうえ、ウエル達にはまだ見せたくない仕掛けがあるんだよな…)

龍斗が気だるそうな感じで歩いていると、後ろから何か巨大な物が地面を踏み鳴らす音が聞こえてきた。

その頃ウエル達は龍斗の遙か上空に浮いていた

ウエル「あれロックドラゴンじゃない？」

ソル「おっ!!

やっと始まるのか」

レイ「兄さんもウエル君もただ観戦しに来た訳じゃないんだからしつかり見て下さい」

レイが文句を言うと2人は目を鋭くして龍斗を見下ろした

ソル「んっ!?

ちよっと待てっ!!

あれってロックドラゴンじゃなくね」

ソルが言った瞬間ウエルとレイはロックドラゴンと思われる生物を見た

そこにいたのは、ロックドラゴンと違い体長は十メートルは軽くあり、体中には岩ではなく結晶が装甲のようになっているドラゴンである

レイ「なんであれはロックドラゴンの上のクラスのアースドラゴン
！」

龍斗（な、何か来た）

ウエル達が話しているうちにアースドラゴンは数十メートル付近まで近付いていた

龍斗が身構えた瞬間全てのものを吹き飛ばすのではないかと思わせる程の鳴き声を出しアースドラゴンは龍斗と自分の周りに不可視の結界を張った

ウエル「マズい」

ウエル達が近寄った時にはもう遅く結界は完成してしまった

ウエル「しまった

レイ君結界解くのにどれくらい時間掛かる？」

レイ「ウエル君と僕が全力でやれば二十分位かな。
兄さんはもしもの為に今は力を使わないでね」

ソル「分かったよ」

ウエルとレイは早速結界の解除に取り掛かった。

その頃結界の中の龍斗も異変に気がついていていた。

龍斗（あいつと向き合った瞬間外気の量が少なくなったな
結界か何かを張られたのかな）

龍斗が予想し周りを見回しているとアースドラゴンは龍斗に向かって突進してきた。

龍斗は気により身体能力を上昇させ『瞬歩』を使い右に避けると、
アースドラゴンの後ろに回り尻尾に構えていた槍を突き立てた。

しかし、アースドラゴンの鱗は硬く槍は弾き返されてしまった。

龍斗なにつ

龍斗は弾き返されてしまった反動で体制が若干崩れそこにアースドラゴンが尻尾を使って風払ってきた。

龍斗は無理矢理槍を自分の前に構えて防御したが三メートル位吹き飛ばされ地面に勢い良くぶつかってしまった。

だが、龍斗は気を使って防御力も共に上昇させていたため何とか立ち上がった。

龍斗（出し惜しみしてる余裕なんてね〜な）

そう思った龍斗は槍に気を纏わせ始めた

龍斗が槍に気を纏わせているとアースドラゴンは空に飛び龍斗から距離を取る

すると結界を張った時のようにまた鳴き声を発した。

アースドラゴンが鳴くと龍斗の周りの地面からダイヤモンドが氷柱状になったものが二十本位龍斗に向かい勢い良く放たれた。

龍斗（あの鳴き声が魔法を発生させる条件だな）

龍斗は四方八方からくるダイヤモンドの一点に向かって走り出した。

龍斗は近付くと槍で向かってくる数本のダイヤモンドを風払った。

するとダイヤモンドは気で作られた刃と衝撃波で真っ二つにされた後吹き飛ばされていった。

そして龍斗はそのまま空にいるアースドラゴンに向かって『瞬歩』を使い近付き先程同様尻尾に槍を突き立てた

前回は弾かれたが今回は前回と違って槍は尻尾に深く刺さった。

龍斗が槍に軽く気を流すと槍の刃が外れ槍の柄と刃が鎖で繋がれていた。

そして龍斗は地面につくとまた槍に気を流した。

すると刃から更に大きな気の刃が現れ太さ二メートル位の尻尾を断ち切った。

アースドラゴンは痛みに耐えきれず地面に勢い良く落ちた。

龍斗「次で決める。」

龍斗はアースドラゴンが起き上がっている間に槍に気を流し刃を槍の柄に戻しアースドラゴンに近付いたがアースドラゴンは再び鳴き声を発し、今度は目に映る位の若干の色が付いた結界を張った。

龍斗「こんな物!!」

龍斗はダイヤモンドを斬った時と同じ様に風払うと結界は音を立てて崩れ去った。

龍斗（んっ？

今なんか変な感触が）

龍斗はその感触に違和感を感じつつそのままアースドラゴンに向かい槍を振ると槍から気で作られた衝撃波が生まれアースドラゴンに傷を負わせていった。

龍斗とアースドラゴンまでの距離が後1、2メートルと迫った時龍斗はポケットから札のような物を取り出しアースドラゴンの額に跳躍して貼り付けた。

するとアースドラゴンは糸が切れた操り人形のように地面に倒れた。

龍斗「これをポケットに入れてたの忘れてた。」

龍斗がアースドラゴンに貼り付けたのは気を練り入れた墨で紙に呪印を書いた物で、動きを完全に封じ込める物だ。

だが、使い勝手は敵の体力を極限に削り尚且つ自分の事を認めさせないといけないためとても悪い。

しかし、コレを使えたという事は龍斗の事をアースドラゴンがある程度認めたという事になる訳だ。

龍斗「よいしょっと」

龍斗は先程切り落とした太さが二メートル近くある尻尾を軽々と持つとアースドラゴンに近付いていった。

そして龍斗はそのままアースドラゴンの尻尾をアースドラゴンの尻尾があつた所に持つて行き気を使って細胞を活性化させて尻尾を元通りにしていった。

アースドラゴン「なぜ貴様は襲ってきた我を治療しているのだ。」

アースドラゴンはいきなり話し掛けてきた。

龍斗「お前喋れたんだな

確かにお前は俺を襲ってきたがコッチだってお前を攻撃したんだから同じだろ。」

アースドラゴン「確かに、しかし貴様は変わっているな好き好んで魔物を助けるなど」

アースドラゴンは若干笑いながら言ってきた。

龍斗「そうかな、俺は普通だと思うよ。

それにお前は俺の事がある程度認めてるだろ」

アースドラゴン「貴様何故そのような事が分かるのだ」

龍斗「お前の額に貼った札は体力をある程度削って相手を認めさせないと効果がないからな

あと俺の事を貴様って呼ばないでくれない

俺には坂口 龍斗って名前がある」

アースドラゴン「そうかすまなかったな
それと私の名はサナタだ。」

龍斗「それにしてもロックドラゴンってのは結構礼儀正しいだな」

サナタ「何を言ってるんだ私をあんな雑魚と一緒にするな」

サナタは若干怒りを含んだ声で龍斗に言ってきた

龍斗「じゃあサナタお前は何なんだよ」

龍斗がそう聞いたウエルはナイフ、レイは杖、ソルは剣を持ち龍斗の前に現れた。

ウエル「離れて龍斗君コイツはロックドラゴンの一つ上のランクの
アースドラゴンだよ。」

ウエルがそう告げた瞬間龍斗は驚きのあまり固まっていた。

ソル「大丈夫か、龍斗」

龍斗「あっはい」

ソルが話し掛けてきたおかげで龍斗は復活した。

龍斗「ソイツはもう戦う気がないそうなんで大丈夫ですよ。
そうだウエル達は回復魔法的な奴出来る？」

レイ「私とウエル君は出来ますよ。
兄さんは出来ないですが」

ソル「俺はそういうなよした術は使わないんだよ」

レイ「実は兄さんは不器用だから回復魔法みたいな繊細な魔法は使
えないんです」

レイは小声で龍斗達に耳打ちしてきた。

ソル「何だよその視線は」

レイが言ったことによりソルをみんなで見た瞬間ソルは言い訳混じりに言った。

ソル「んで何で回復魔法が必要なんだ？
どっか怪我でもしたか？」

龍斗「実はサナタを治療したいんだけど、手伝ってくれないか？」

ウエル「龍斗君まさかサナタってこのアースドラゴンの事？」

龍斗「他に誰がいるんだよ」

ウエル「あり得ない！！」

龍斗君キミはなに世迷い事言ってるの。」

龍斗「何言ってるんだよ。」

この世に死んでいい命なんてないだろ!？」

龍斗が叫ぶとウエル達は黙ってしまった。

レイ「確かにそうですね、龍斗君私はキミを手伝いますよ。」

数秒間沈黙が続いた後レイは口を開けそう言った。

ウエル「確かに龍斗君の言う通りだね。
僕も手伝うよ。」

ソル「俺は手伝えないけどお前の意見には賛成だ」

ウエルとソルもレイに続くように言った。

サナタ「全く物好きな奴らだ。」

サナタは皮肉めいた口調で言ってきた。

龍斗「別に不思議では、無いだろ。
生物は基本的に一つしか命は無いんだから。」

サナタ「全くだ」

龍斗に説教らしき物を聞かされ若干笑いながら呟いた。

龍斗「ウエルとレイさん始めましょうか

レイさんはウエルと一緒に尻尾以外の傷を治してください。

俺は切断しちゃった尻尾をしっかりと治さないといけないのでよろしく願います。」

龍斗がそう言うのと二人は頷き、サナタに近付いていった。

レイ「『水の聖霊よ 我的呼びかけに応え 傷を癒せ ウォーター
ヒーリング』」

ウエル「『光の聖霊よ 我的呼びかけに応え 傷を癒せ ライトヒ
ーリング』」

二人はそれぞれ詠唱するとウエルの手の上には光が、レイの手の上には水が浮いていた。

レイ・ウエル「split」

二人がほぼ同時に唱えると手の上にあった光と水がそれぞれ細胞分裂のように割れては元の大きさになっていった。

分裂して増えた光と水はそれぞれサナタの傷に付き傷を癒やしていった。

龍斗もその光景を横目で見ながら尻尾に気を送り傷を癒していった。

そして、ウエルとレイは三十分近くで治療も終わり、サナタと話していた。

ウエル「サナタ君

キミはアースドラゴンなんだろ？

何故キミはこちらの世界に居るんだい？」

サナタ「実はよく覚えていないんだ。」

レイ「覚えてないって可笑しくないですか？」

ウエルの横に立っていたレイが首を傾げながら疑問を言った

ウエル「確かに下級と中級レベルは別だけど、上級クラスの魔物は基本的に地球とこの世界の間にあるから、来るときは複雑で最高難易度の術を使わないといけないからまず、こちらには来れないんだよね」

サナタ「だが我はこちらの世界に気付いたら飛ばされていた。しかも、我は元々アースドラゴンではなく、ダークネスドラゴンだったんだ。」

レイ「えっ!？」

元々はダークネスドラゴンだったんですか!？」

サナタ「ああそうだ

更に力に規制が掛けられてるらしくて、ある一定以上魔力を使うと魔法の効果が下がってしまうんだ。」

ソル「何が起きたんだろうな。」

龍斗「確かに何が起こったんだろうね。」

治療をいつの間にか終えた龍斗とさっきまで暇すぎて寝ていたソルがレイとウエルの背後にたっていた

レイ「ビックリした。
なんだ兄さんと龍斗君か」

ウエル「いきなり背後に立たないでよ。」

レイとウエルはビックリして、体を動かした後二人に文句を言ってきた。

龍斗「ところでダークネスドラゴンってなに？」

龍斗は小声でウエルに聞いた。

ウエル「ダークネスドラゴンってのは闇の属性のドラゴンの中で一番ランクが高いドラゴンだよ。」

ウエルが話しているとソルが話始めた。

ソル「そういえば龍斗のランク決めまだしてなかったな。
龍斗今からロッキドラゴン探しに行くぞ。」

龍斗「さすがに疲れたんでもう無理ですよ。」

サナタ「ロックドラゴンなら我がここに来たときいきなり襲いかかってきたから殺ってしまった」

ソル「マジかよ！

じゃあランク決められね」

ソルは頭を抱えながら叫んだ。

サナタ「我が決めようか？」

ソル「大丈夫なのか？」

サナタ「安心しろ。

我は龍斗の実力を一番良く分かっている

それにランクというやつも大体理解しているしな。」

ソル「ならよろしく頼む。」

ソルが言うつとサナタは考え始めた。

数分後サナタは龍斗を見た

サナタ「多分ランクは人間のランクでB位だな」

レイ「そうですか。

分かりました書類にはBで記載しておきます。」

ソル「じゃあよろしくな。」

レイ「何言ってるんですか兄さんがやるんですよ
今回何もやってないんですし」

レイがそう言いながらソルを冷たい視線を送るとソルは唸りながら
俯いた。

ソル「わったよ

やればいいんでしょやれば。」

ソルは俯いたまま拗ねて言った。

サナタ「龍斗

お主に願いがある聞いてくれるか？」

龍斗「ああ

俺ができる範囲ならやってやるぜ。」

龍斗は胸を張り拳で胸を叩きながら言った。

サナタ「我をお主のセカンドサーバントにしてくれないか？」

龍斗「なんだそれは？」

龍斗は聞かされていないが、サーバントにはファーストとセカンドの二つがある。

サーバントは使い魔の事で特殊な魔法陣で召還して契約を結んだ者をファーストサーバント。

アルケイディアに元々いて契約を結んだ者をセカンドサーバントと呼ばれているが、基本的にアルケイディアにいる魔物は中級以下なのでまずセカンドサーバントを持っている人は少ない。

龍斗はウエルからこの事を小声でまた教えてもらった。

龍斗「しても良いけど一つ言いたい事がある。
俺は地球の出身者だがそれでもいいな。」

サナタ「勿論だ。

そんな事聞くまでもない。」

龍斗が聞くとサナタは即答した。

龍斗「分かったと言いたところだがどうやって契約はするんだ？」

ウエル「ちょっと待っててね。」

ウエルはそう言つと何もない空間から鞆を出してそこから一枚の紙を取り出した。

龍斗「何だよその紙？」

紙には複雑な魔法陣が書いてあつた

ウエル「これは契約書類みたいなものだよ
龍斗君これに魔力を思いつきり流して」

ウエルは龍斗に紙を手渡すと龍斗は紙に水晶の時と同様に魔力を流し出した。

すると、龍斗が持っていた紙が光って紙の魔法陣が無くなり地面に現れた。

ウエル「二人は互いに名前をいった後に龍斗君が『我ら此処に主従の契約を行う』っていえば終了だよ。」

ウエルが言い終わると龍斗とサナタは向かい合った

龍斗「俺の名前は坂口 龍斗」

サナタ「我が名はサナタ・ダークネス」

龍斗「我ら此処に主従の契約を行う」

龍斗が言い終わると魔法陣がより一層輝きだし龍斗の手に模様が浮かんだ。

ウェル「契約完了」

光が止み龍斗が前を見るとそこには先程までと違い体長は15メートルはある黒い色をしたドラゴンが立っていた。

龍斗「サナタ何だよその格好」

サナタ「何を言って…」

我の姿が元に戻っている。」

龍斗の言葉に自分の今の姿に気づきサナタは喜びの叫びを空に響かせていた。

レイ「多分契約の時に掛かっていた呪いまで一緒に消えたんでしよう。」

レイは冷静に考えてそう言った。

サナタ「そういえば我と汝らは自己紹介をしていなかったな、我の名はサナタ改めてよろしく頼む。」

ソル「俺はソルだ」

ちなみに、ギルドマスターをやっている。」

レイ「私の名前はレイです。

ソルは僕の兄さんで私は副ギルドマスターをやっています。
よろしくお願いします」

ウエル「僕の名前はウエルだよ。

僕は魔法学校の先生だよよろしくね」

サナタ「レイは予想通りだがまさか、残りの二人もそんな大事な役割に付いているなんて、思いも寄らなかったな。

世の中も変わったものだな。」

サナタが言うとレイは嬉しそうに笑いウエルとソルは落ち込んで地面に四つん這いになっていた。

レイ「さて、用も終わったしそろそろ帰ります?」

龍斗「そうですね。」

レイが聞くと再起不能な位落ち込んでいるウエルとソルの代わりに龍斗が答えた。

レイ「じゃあ行きますか」

レイが魔法陣を地面に描こうとした瞬間遠くで重たい物が地面に落ちる音がそこら辺から聞こえてきた。

一番身長の高いサナタが周りを見渡すと龍斗達はいつの間にか、ロツクドラゴンの群れに囲まれていた。

サナタ「大変だ。

ロツクドラゴンの群れに囲まれているぞ」

サナタが言うときさすがに四つん這いになっていたウエルとソルも立ち上がり、先程のように空に飛んだ。

レイ「多分サナタ君に仲間殺された仇討ちってところでしょっか」

ウエル「何か良いこと思い付いちゃった。」

ソル「ウエルもか、俺も実はそう思った所だ。」

ウエルとソルは互いに武器を持った。

ウエル・ソル「ぶっ殺す」

二人が同タイミングで言うと、ソルの背中から赤い龍のような翼がはえてソルは北、ウエルは東のロックドラゴンに向けて散っていった。

レイ「ちよつと二人共」

レイはソルとは違い青い龍のような翼を背中からはやし飛び立とうとしていた。

龍斗「ちよつと待つてください。」

ロックドラゴンを説得しないで殺していいんですか？」

サナタ「主よ、ロックドラゴンは下等な種族であるが故に我らと違う言葉を理解できない。」

それに、此方に住むドラゴン達は皆この世界では強いせいかな死なずに数百年生き続けるため、逆に数を減らさないと自然のバランスが崩れてしまうんだ」

レイを龍斗が呼び止め言うと、レイの代わりにサナタが答えた。

龍斗「そうか

レイさん呼び止めてすいません。」

レイ「いえいえ

気にしないでください。」

とりあえず、サナタ君と龍斗君と一緒に南のロックドラゴン達を倒して下さい。

私は西側に行きますので」

龍斗「分かりました任せてください」

龍斗は頷いてそう言うレイも頷き返しロックドラゴンの方に向かっていった。

龍斗「サナタ行くぞ」

サナタ「主よ、頼みたいのだからいいか？」

龍斗「なんだ？」

サナタは言いにくそうにしているので龍斗が聞くと覚悟を決めたの

か、話し始めた。

サナタ「主がもしいいのなら魔力を分けてもらって、能力を使いたいのだがいいか？」

龍斗「良いに決まってるだろ。
でも、魔力の送り方なんて知らないぜ。」

サナタ「それなら、我が自分で出来るから主は心配しなくても大丈夫だ。」

サナタはそう言うつと龍斗の中から湯気のような物が勢い良く出てきた

そして、湯気のようなものがサナタを包み込んだ。

龍斗「なんだこれは！？」

？「龍斗コレが魔力だ」

龍斗が驚いて声を上げた。

すると何故かサナタの方からサナタの声ではない声が聞こえた。

龍斗は急いでサナタが居た方向を見た。

そこには、龍斗位の背の髪も目も服も全て真っ黒な格好をした男が立っていた。

龍斗「お前は誰だ！！

サナタをどこへやった。」

？「俺はサナタだこれが証拠だ。」

黒髪の青年は手の甲を見せると、龍斗の手の甲も光り出した。

サナタ「これは契約印だ

これがあるということは、俺と主である龍斗が主従関係に結ばれているということだ。」

龍斗「お前サナタだったのか…

っていうか、何だよその喋り方」

龍斗は驚いた後疑問に思った事をサナタに向かい冷やかな目線と

共に送った。

サナタ「ゴメンな

実はこの能力使うと思考がその姿に合った思考になるために口調や態度も変わってしまうんだ。」

そう言いながら、サナタは頭を下げた

龍斗「そういう事ならいいよ

どっちかっていうとそっちの口調の方が喋りやすい。」

サナタ「分かった

元の姿でも同じ喋り方にするように気をつける。」

龍斗の言葉を聞いて頭をあげた後龍斗を見ながら言った

龍斗「そうしてくれ

今は取りあえずロックドラゴンに向かいながら話そう」

サナタ「分かった」

龍斗の提案にサナタは頷くと、二人は走り始めた。

龍斗「そういえばその姿だとどれ位の力が出せるんだ？」

サナタ「元の姿とは魔力的には変わらない
だけど、男の姿だと、攻撃魔法しか出せない。」

龍斗「ちよつと待て

男の姿はっていうことは防御する時はもしかして女になるのか？」

サナタ「その通りだ」

サナタは龍斗の質問に当たり前のように答えたため龍斗は苦笑いしていた。

龍斗「でも、なんで人間になったんだ？」

サナタ「元の姿だと敵に狙われ放題だからな、それに人間になれば
龍斗といざという時に一緒に戦えるしな。」

サナタは笑いながら言つのを見て龍斗は嬉しくなり更に走る勢いを速くした

サナタも龍斗に合わせて走る速度をあげた。

その頃ウエル達はそれぞれに戦っていた。

ウエルはロックドラゴンに囲まれていた。

手には金色の牙のような形のナイフを持っていた。

ウエル『雷光の神よ 我が前に立ち塞がりし者に 汝と我の力を
示し 敵を切り刻む 牙となれ the dance of th
e tusk of one hundred thunder』

ウエルの周りには雷を纏った百本の牙が踊っているかのように飛び
回っていた。

その牙達はロックドラゴン達を飛び回りながら切り刻んでいった。

ロックドラゴン達は牙で切られるたびに牙に付いている雷によって
筋肉が硬直させられ落ちていった。

ウェル「お終いだよ」

ウェルはそいいながら空に向かい指を鳴らした。

すると、先程まで踊るように動いていた雷の牙が止まり地面に倒れているロックドラゴン達に次々と刺さっていった。

ウェル「discharge of electricity」

ウェルが更に呪文を唱えると、ロックドラゴン達に突き刺さった牙から雷が発せられた。

ロックドラゴン達は雷により心臓が停止して、次々と灰になって消えていった。

ウェル「久しぶりに大技使って疲れた」

さてと、ソル君とレイ君もそろそろ終わるかな。」

そう言うと、ウェルはソルとレイの方向を静かに見た。

ソルは手に炎のような波を打った大剣を持っていた

ソルはその大剣を振るいロックドラゴンを斬りながら、翼から火の粉を出していた。

ソルの出した火の粉はロックドラゴンに付着していった。

ロックドラゴン達に火の粉が付着したのを確認すると、ソルはレイの方に飛んでいった。

レイは蒼いレイピアを持ち魔法を使って攻撃していた。

レイは氷の魔法と水の魔法に紛らわせて、氷の粉をロックドラゴン達に付着させていった

氷の粉がロックドラゴン達にしっかり付着しているのを確認すると、レイはソルと同じように距離を取るった。

そこにソルがちょうどロックドラゴンの群を引き連れて来た

ソル「準備はいいか？」

レイ「当たり前ですよ。」

ソル「なら行くぞ!!」

ソルが言つとレイは静かに頷いた。

ソル「『固有スキル i n c a n d e s c e n t w i n g』」

レイ「『固有スキル f r e e z e w i n g』」

二人は一呼吸おいた後に呪文を唱えた。

二人に向かい飛んできたロックドラゴン達は呪文が唱えられると、その場に静止した。

すると、ソルが火の粉を付着させていったロックドラゴン達は一気に燃え上がり灰になっていった。

対照的にレイが氷の粉を付着させていったロックドラゴン達は凍り付いた

凍り付いたロックドラゴン達は脆くなり、互いにぶつかり合ったり、

地面に落ちて砕けていった。

その光景を見ながらソルは相当ストレスが溜まっていたのか、大声で笑い出した。

レイはそんなソルを見ながら苦笑いをしていた。

ウエルはソル達がロックドラゴンを倒したのを確認して近付いていた。

ウエル「じゃあ龍斗君の所行きますか？」

レイ「兄さんは放っておいて行きましょう」

そう言うとうエルとレイは未だに笑い続けるソルを放って龍斗の方に向かった

その頃龍斗達はやっとロックドラゴンの群に近づいた。

サナタ「龍斗は最初は下がっていてくれ先ずは俺が行く」

龍斗「でも魔力に制限掛かってるんだろ。
あんなに数いるのに大丈夫か？」

サナタが自信満々に言ってきたため龍斗は若干不安を抱き言った。

サナタ「俺が契約した時に制限が解除されたみたいだから安心して
大丈夫だぞ。」

龍斗「そうか…なら行ってこい。」

サナタ「ああ、行ってくるぜ。」

サナタは元気よく返事をするソルやレイと同じように黒い龍の翼
を背中に生えさせてロックドラゴンに向かい飛んでいった。

龍斗（さてと、呼ばれるまで見物でもしてますかな。）

龍斗は木にのぼると枝に座りサナタを見始めた。

ロックドラゴン達はサナタを見つけるや否や魔法により大きさは小
さいがサナタが龍斗に放ったダイヤが氷柱状になった物を放った。

そして、六十本近くのダイヤがサナタに向かい飛んでいった。

サナタはいつの間にか黒髪ロングヘアーの女性に変わっていた

サナタ「『ダークネスウォール』」

サナタは呪文を唱えて闇の魔力を手のひらに集め空中に壁のようにその魔力を広げていった。

すると、ダイヤは空中に広げた闇の魔力に吸い込まれ消えていった。

サナタはすかさず男なった

サナタ「『ダークネスゲート』」

更にサナタは詠唱をするとサナタは先程の闇の魔力の中に手を入れ大剣を取り出した。

剣のながさはサナタの身長近くあり色は柄から刃まで全てが白と黒で染まっており、柄の下にも小さな剣が付いていた。

サナタが大剣を出している内にロックドラゴンは更に先程の倍近い数のダイヤをサナタに打った

サナタ「俺の剣から逃げ切れるかな？」

やるぞ『wear darkness and do it a
s word』

サナタが大剣を構えると、サナタの大剣から闇の魔力が溢れ出し始めた。

サナタは剣を振ると纏わりついていた魔力がダイヤを吸い込んだ。

サナタはもう一度剣を振ると先程吸い込んだダイヤがロックドラゴンに向かって飛んだ。

ロックドラゴン達の一部がサナタが放ったダイヤにより悲鳴にも似た叫び声を出しながら、体を貫かれた

ロックドラゴン達はその光景を見て警戒したのか、一度後ろに下がった。

膠着状態が数秒間続きロックドラゴンの一頭がサナタに向かい飛んで行くと、連れて何頭かが共に向かったいった。

いつの間にか止まっていたはずのロックドラゴン達は一頭残らずサナタに向かい飛んで行った。

サナタは一番最初に出てきたロックドラゴンに向かい飛んで行くと、ロックドラゴンはサナタを呑み込もうと口を開けた。

サナタはロックドラゴンが口を開けるのを見ると何故か自分から口の中に飛び込んだ。

龍斗がサナタが呑み込まれたのを見て、慌てて呑み込んだロックドラゴンに向かった。

龍斗とロックドラゴンとの距離ひらいていたため空中にいるロックドラゴンに向かい瞬歩で近付くと、他のロックドラゴン達が龍斗に気付き、立ち塞がった。

龍斗は急いで体をねじり向かって来たロックドラゴン達に先程サナタに使った衝撃波を放った。

しかし、龍斗の体勢は不安定だったため、衝撃波の威力はとても低くロックドラゴンの鱗に弾き飛ばされてしまった。

マスイ
龍斗

龍斗は槍を自分の前に構えると、先程衝撃波を弾いたロックドラゴンが龍斗に向かって突撃してきた。

龍斗は槍ごと吹き飛ばされその衝撃で空中を勢い良く飛んだ。

空中を飛びながらロックドラゴンの方を見るとロックドラゴン達の一頭がいきなり苦しみ始めた。

龍斗は頑張って体制を整えようとしたが、空中をスカイダイビングしながらの勢いで飛んでいるため体制を整えられずにいた。

龍斗は最終的に数十メートル吹き飛ばされて体制を直せず木に勢いよくぶつかり地面に落ちた

龍斗は地面に落ちたあと槍を杖代わりに立ち上がり急いでロックドラゴン達の方を見た。

すると、龍斗が先程見たロックドラゴンの一頭の中から微かに闇の魔力が漏れ出した。

龍斗が目を細めて気で目を強化して見ると。

ロックドラゴンは苦しんでいるらしく苦痛の鳴き声をあげた。

そして、闇の魔力が徐々にロックドラゴンから溢れ出しロックドラゴンは灰になった。

そのロックドラゴンの灰の中からサナタが現れた。

サナタ「龍斗危ないから後ろに下がれ」

龍斗はいきなり現れたサナタに驚いたが頷いた。

すると、サナタも了解したという意味で頷いき返した。

龍斗はそれにすぐに後ろに下がろうとしたがダメージが大きすぎて、上手く動けずにいた。

龍斗（チクシヨー

体中がヤバい痛い後でサナタに文句言ってやる）

龍斗はサナタがいきなり敵に食べられるなんて危ない事をしたことを怒っていた。

サナタはロックドラゴンの中で呪文の準備の為に魔法陣を描いたのだが、龍斗を巻き込む危険性があるため使えずにいた。

魔法陣は魔法を使用すると、無くなってしまうためサナタは魔法を使わずに剣のみで戦っていた。

すると、ロックドラゴンの一頭が龍斗を見付けて龍斗に向かい飛んで行った。

サナタはそれに気が付きロックドラゴンを追おうとしたが、他のロックドラゴンに阻まれて行けなかったり。

サナタ「龍斗逃げろー！！」

サナタは龍斗に向かい叫びながら立ちふさがっているロックドラゴン達を斬り伏せていった。

龍斗叫び声を聞いた龍斗は後ろを振り返ると、既にロックドラゴン

は後数メートルの位置にまで近付いていた。

そして、ロックドラゴンは追い討ちをかけるのかのように、ダイヤを放った

龍斗は槍を構えようとするが足に力が入らず膝を着いてしまった。

龍斗（終わった俺の人生）

龍斗は諦め静かに瞼を閉じるが幾ら待ってもダイヤは来なかった。

あれおかしいな
龍斗

龍斗はゆっくりと瞼を開けると金髪の男が龍斗の前に立ち金色のダガーでダイヤを防いでいた。

龍斗「ウエル!!」

龍斗が叫ぶとウエルは龍斗の方を見た。

ウエル「ギリギリセーフ」

ウエルはダイヤを弾き飛ばしてロックドラゴンに向かい手に持っていたダガーを投げた。

ダガーはロックドラゴンの額に刺さりロックドラゴンは鳴く暇もなく灰になった。

サナタはその光景を見るとホットしながらロックドラゴンを次々と灰に変えていった。

サナタ「ウエル、龍斗と一緒に逃げる！！」

サナタは再び叫ぶとウエルはサナタの方を見て不思議そうな顔をしていた。

ウエル「龍斗君あれ誰？」

龍斗「いいからいったん離れよう」

龍斗はウエルの疑問をスルーした。

ウエル「わ、分かった」

ウエルは龍斗が答えてくれなかったことに対してショックを受けたが、今は落ち込む場合ではないため龍斗を背負った。

ウエル「行くよ龍斗君『ライティングムーブ』」

龍斗達は雷となって消えた。

サナタ「さて、これで終わりにしよう。」

サナタはそう言うのと手の甲に魔力で描いた魔法陣を展開させた。

サナタ「死ね『death world』」

サナタが唱えた直後魔法陣から闇の魔力が溢れ出しドーム状に形を変えていった。

レイ「あ、あれは…」

ウエルはソル達の元に戻りレイの言葉により後ろを振り返ると、サ

ナタが作り出したドームを見て言葉を失った。

そして、ドームの中からはロックドラゴン達の悲鳴と思われる叫び声が聞こえた。

数秒後辺りは静まり返り沈黙を破るかのようにドームは音を立てて砕け中から黒龍の翼を生やした黒髪の男が片手に剣を持ち浮いていた。

ウェル「りゅ、龍斗君改めて聞くけどあれは誰？」

龍斗「あれはサナタだよ
お願いだからおろしてくれない？」

ウェル「う、うん」

ウェルは混乱しながら背負っていた龍斗を地面におろした。

すると、サナタは龍斗達を見つけたらしく龍斗達の元に向かった。

龍斗はそれを見て立って迎えようとしたが、足に力が入らないため動けなかった。

サナタ「龍斗怪我をさせてすまなかった。」

龍斗「ああ」

龍斗はサナタに文句を言おうとすると、謝られたため怒れずにいた。

ソル「龍斗そいつ本当にサナタか？」

龍斗「そうですよ。」

サナタ回復魔法出来るか？」

サナタ「出来るよ」

龍斗「頼めるか？」

サナタ「勿論だ」

サナタは龍斗に向かい歩きながら、黒髪の子に変わった。

すると、その光景を見ていたウエル達は驚いて口をポツカリとあけていた

サナタはウエル達の事を構わず龍斗の傍により胸に手をおいた。

サナタ「『闇の聖霊よ 我的呼びかけに応え 傷を癒せ ダークネスヒーリング』」

すると、サナタの手には今まで敵を消してきた底なしの闇とは違い見ているだけで、心を癒やす淡い闇が現れて龍斗の傷を癒し始めた。

ウエル達は龍斗をサナタが治療している間話し合っていた。

ウエル「あれってどういう原理なのかな？」

ソル「魔法か何かか？」

レイ「呪文名を言わなかったんで、魔法ではないような気がします
やっぱり能力でしょうか？」

ソル「でも、ダークネスドラゴンにそんな能力があるなんて聞いた
ことはありませんよ」

ウエル「もしかしたら『無詠唱魔法』を使う上で上級の魔物は呪文名なしで魔法使えるとか？」

ソル「だったら、俺らの前でわざわざ詠唱して魔法使う必要性無くない？」

レイ「もしかして、セカンドサーバントの追加能力？」

ウエル「持っていないから知らないけどあながち間違いじゃないかもしれないな」

ウエル達は最初は声が小さかったが途中から少しずつ声が大きくなり、無詠唱魔法辺りから既に何もなくても、声は聞こえていた。

龍斗「サナタありがとな」

サナタ「礼には及びません悪いのは龍斗様に心配を掛けた私ですから」

龍斗は礼を言うとサナタは俯いてしまった。

龍斗は溜め息を出した後立ち上がり、ウェル達の方に向かい歩き出した。

いち早く暇そうにしていたソルが龍斗に話し掛けて来た。

ソル「サナタはどうやって変身してるんだ？」

龍斗「さあ？」

俺も能力としか聞かされてないですよ。
本人に聞いてみればどうですか？」

そう言いながら龍斗はサナタを指さした。

サナタは体育座りで座っており、とても話し掛けられる状態ではなかった。

ソル「お前、龍斗！！
テメーは魔王か、あんなテンションでいる奴に話し掛けるとか、どんな罰ゲームだ！？」

ソルが文句を言っていると、レイが横から入ってきた。

レイ「兄さんとおどお。
今はとりあえず帰りましょう。」

ソル「どおどおって俺は馬かゝ!?!」

今度はレイにソルは文句を言い始めたため、龍斗はサナタの近くに避難した。

龍斗は逃げると同時にサナタに帰るといふ事を告げに来たのだが

龍斗（話しかけにくい）

なかなか言い出せずにいた。

龍斗「あ、あのさ」

サナタ「龍斗様なんでしょうか？」

サナタは俯いていたサナタは体育座りのまま顔だけ上げて龍斗を見た。

龍斗はサナタは使い魔というのは分かっているのだが、姿は列記とした女性だということを意識してしまっていた。

龍斗（やべー
言葉が詰まって出ない）

サナタ「主どうしたのですか？
先程から様子がおかしいですが」

龍斗「え、えっとそろそろ帰るみたいだから行かない？」

龍斗は右手を差し出しながら言った

サナタ「分かりました。
では、行きましょう。」

サナタは右手に手を添え立ち上がった。

龍斗達がウエルの所に行くと頬が赤く腫れたレイとスッキリしたような感じのソルもいた。

龍斗（危なかった。

もし、あそこにいたらレイさんみたいになってたな）

龍斗はそう思いながら苦笑いしていると、ウエルが話し掛けてきた。

ウエル「龍斗君とサナタ君そろそろ帰るから魔法陣に乗って」

龍斗「ああ、今行く」

龍斗が行くと半径三メートル位の円が描かれていた。

龍斗達が乗ると、ウエル達は既に魔法陣に乗っていた。

ウエルは二人が乗ったのを確認すると、呪文を唱えた。

ウエル「『gate open』」

ウエルが唱えた瞬間魔法陣は輝きだし龍斗達は魔法陣と共に消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9940i/>

龍斗と魔法の方程式

2010年10月10日02時05分発行